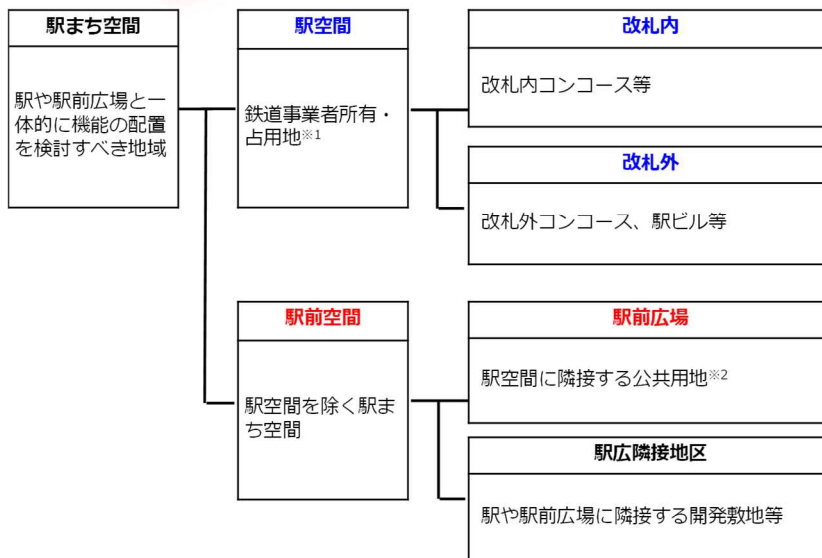
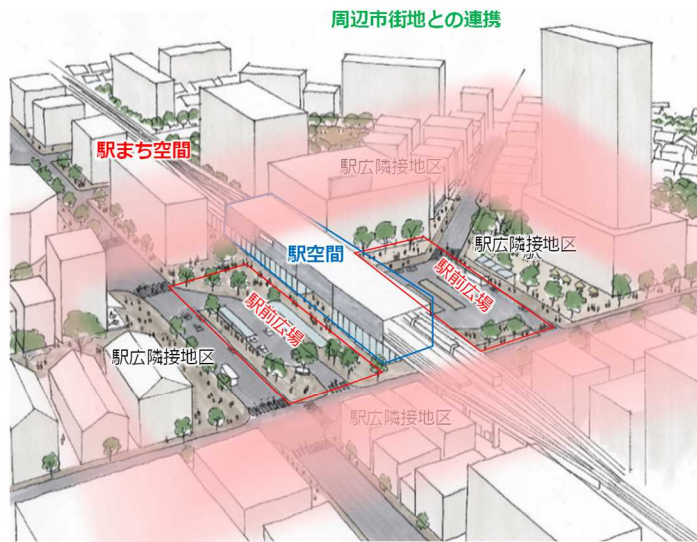


駅まちデザインの手引き骨子

～ 駅まちデザインの考え方・進め方 ～

人を中心とした「居心地が良く歩きたくなる」まちなかや、職住近接・一体の生活圏の形成への注目が高まる中、駅を中心とした交通結節点の重要性が高まっています。そのため、国土交通省では、駅や駅前広場と一体的に検討することが期待される地域を「駅まち空間」と捉え、「駅まちデザインの手引き」の作成に取り組んでいるところですが、このたびベースとなる考え方を骨子としてまとめました。

「駅まちデザインの手引き」は、本年夏頃の完成を目指して検討会において議論が進められています。一連の取組を通じ、よりよい駅まち空間の形成に資することを期待しています。

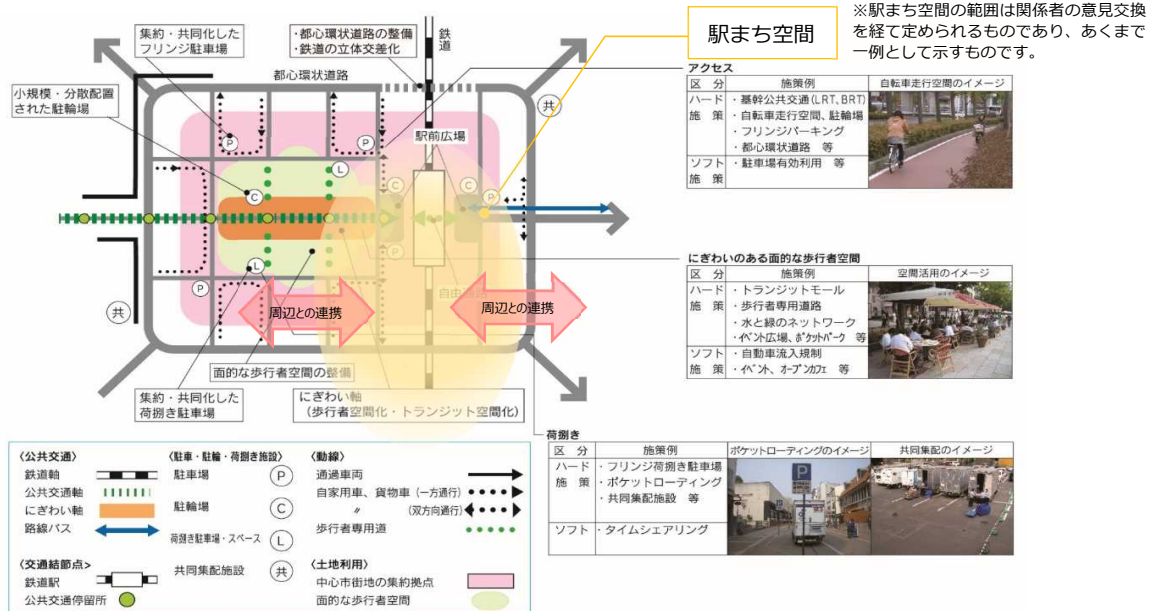


※1 協定駅前広場は除く
 ※2 協定駅前広場内の鉄道事業者所有・占用地を含む

「駅まち空間」の概念図

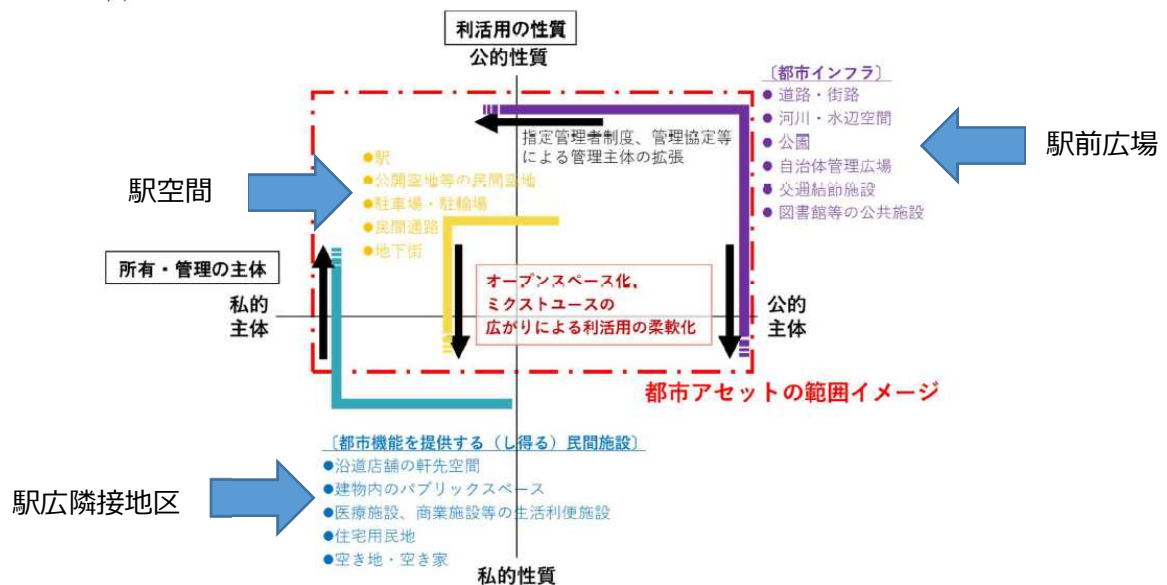
1. 駅まちデザインにおいて意識すべきこと

- 駅まちデザインは、周辺市街地とのつなぎ方を意識しつつ、計画段階から「備えるべき機能」、「確保すべき空間」に加え、「活動を支える運営」の視点も含めて検討を進めることが重要です。



駅まち空間と周辺市街地の連携イメージ

- 既存ストックのうち、その利活用が駅まち空間の質や利便性の向上に資するものを総じて「都市アセット」として捉えることが重要です。駅まち空間の都市アセットを効果的につなぎ、「居心地が良く歩きたくなる」空間を形成することで、回遊性を高めることが望めます。
- そうすることで、都市アセットは単なる「動線と個別要素空間」ではなく、滞在を楽しむ「一体的な場」としても機能するようになります。



都市アセットの範囲イメージと駅まち空間の位置づけ

出典：デジタル化の急速な進展やニューノーマルに対応した都市施策のあり方検討会資料（駅まちデザイン検討会にて一部加筆）

- 将来起こりうる社会経済の変動に対応できるよう、柔軟に活用できるオープンスペースを確保する等、機能配置や空間利用の自由度が高い計画とすることが求められます。
- 近年、デジタルテクノロジーが加速度的に進展しており、人々が集まる空間は情報が集まり易い空間でもあるため、「駅まち空間」はサイバー空間上の拠点となるポテンシャルもあります。「駅まち空間」は、多様な情報にアクセスできる「情報の駅」として、また、集まる情報を活用したスマートプランニング※の実装の場として期待されます。

※個人単位の行動データをもとに人の属性毎の行動特性を把握した上で、施設配置や歩行区間等を変化させたときの歩行者の回遊行動のシミュレーションを実施しながら施策や取り組みを検討する計画手法の総称

(出典：スマートプランニング実践の手引き【第二版】国土交通省(平成30年9月))

2. 駅まちデザインの進め方

構想段階

- 構想の初期段階から、地方公共団体、鉄道事業者、開発事業者、地権者等の様々な関係者が、それぞれの駅まち空間との関わり、将来の視点等を情報共有する連携の場を築くことが重要です。
- 幅広い関係者の理解促進を図るため、ビジョンとランドデザイン(将来像と空間原則)を共有することが重要です。

計画・事業化段階

- 「駅まち空間」をベースに、周辺市街地との連携も考慮しながら、効果的な「機能の連携」と「空間の共有」のあり方を検討することが望まれます。
- 駅まち空間の再構築は、複数の個別プロジェクトが連携して一体的な都市アセットの形成を目指すものである場合が多いことから、プロジェクトマネジメントを担う組織を設けることで、総合調整が円滑になります。
- 駅まち空間のスペースが不足する場合には、季節や時間帯に応じてひとつの空間を様々な用途に活用する(マルチユース)、立体的な機能配置も比較対象に含めて検討する等、スペースの有効活用に向けた柔軟な工夫が求められます。
- 魅力をわかりやすく示す方策として、VR(Virtual Reality)や模型による可視化や、社会実験の活用等が挙げられます。

管理・運営段階

- 駅まち空間内の都市アセットは、「居心地が良く歩きたくなる」空間となることを通じて、面的・立体的な広がりを活用しながら、滞在を楽しむ「一体的な場」とすることが重要であり、管理区分を超えて一体的な管理・運営が望まれます。